

『大学の真の実力』マクロ分析

【私立大】一般入試の入学者占有率は「25～50%」の学部が最多！
推薦入学者の 53.2%が指定校制！
就職率は 73.0%！ 退学率は 8.1%！

旺文社 教育情報センター 平成 24 年 10 月

大学の教育情報公開に基づき、旺文社では昨年に引き続き『大学の真の実力 情報公開 BOOK』を刊行している。ここでは本誌に掲載している大学別の詳細データを集計し、マクロ分析として、“大学の今の姿”を俯瞰する。

※当記事のデータは 2012 年 8 月 21 日現在集計分(675 大学)を基に算出した速報値。

1. 入試関連情報の公表率

私立大で入学者数の公表率がアップ！

教育情報の公表義務化を受け、進路指導の担当教諭をはじめ教育関係者が注目した公表項目のひとつが入学者数だ。大学の入学定員割れが社会関心事となるなか、大学経営はもちろん、教育の質の担保にも直結し得る入学者数に関心が集まるのは自明だ。

国公立大では、入学者数をはじめ入学志願者数、合格者数、どの入試で何名が入学したのかがわかる入試方式別の入学者数についてはすべて公表されている。

一方、私立大の入学者の公表率は、95.9%という調査結果となった(回答校における割合。私立大総数における割合は 85.8%)。昨年の小社実施調査 92.3% (495 校中 457 校が回答)を踏まえると 3.6 ポイントの上昇は、社会的関心の高まりや、教育情報の公表義務化を受けた大学の取り組みの表れとも言えよう。

ただし国公立大と私立大では、入試方式別の入学者数の公表の仕方に差異がある。私立大でも、国公立大と同様に、入学者数の明細を全て回答した大学が 208 校ある一方、「一般入試以外は非公表」「全入試の合計」「指定校制と AO は非公表」「推薦は公募制と指定校制の合算」など明細不明のケースは少なくない。

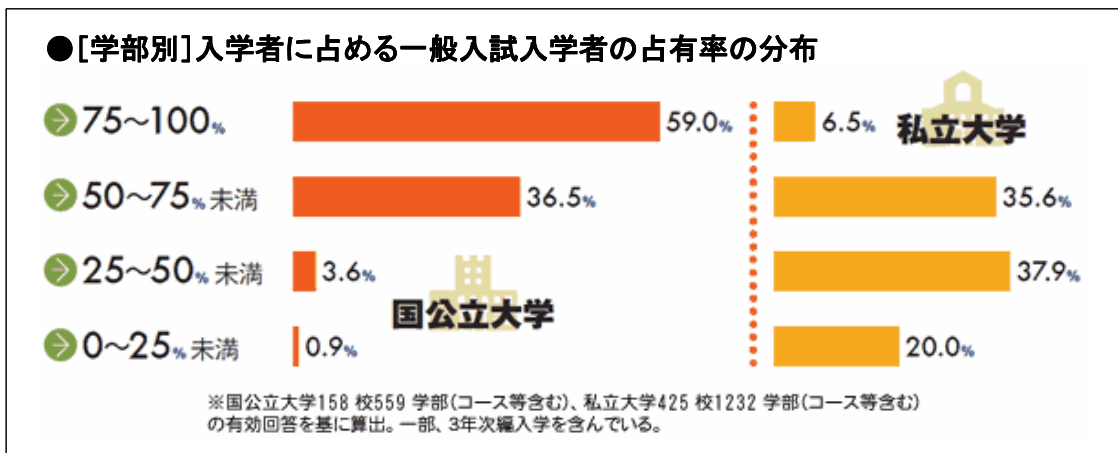
●入試関連情報の公表率(回答校における割合)

	国公立大学	私立大学
➔ 志願者数	100.0%	94.0%
➔ 合格者数	100.0%	93.2%
➔ 入学者数	100.0%	95.9%

※国公立大学158校、私立大学517校の回答を基に算出。私立大学の公表校数は、志願者数486校、合格者数482校、入学者数496校。

2. 一般入試入学者の占有率

国公立大は一般入試で入学者確保、私立大は二極化！



一般入試を経て大学に入学する者の割合が、推薦入試、AO入試の実施拡大によって低下していることは、文部科学省資料でも見て取れる。私立大では既に5割を切っているのが現状だ。ただし文科省資料は総数での発表であるため、詳細データの把握はできない。

そこで、今回の調査を基に、学部別に入学者に占める一般入試入学者の占有率を算出してみた。グラフは、一般入試入学者が、当該学部入学者全体のうち何%を占めているかを算出した上で、それを占有率ゾーン別に区分したものだ。

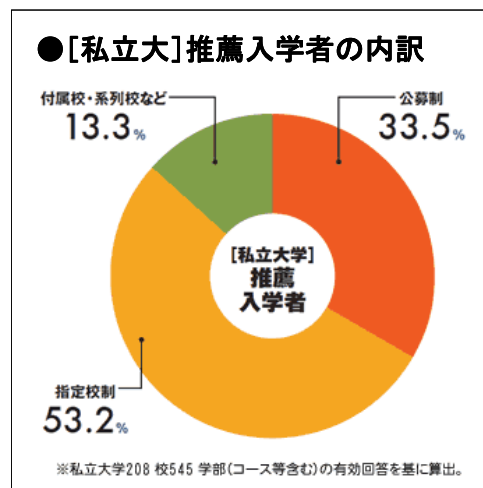
たとえば、国公立大の59.0%の学部では、4人のうち3人以上(=75%以上)が一般入試入学者ということだ。国公立大では、全体の95.5%の学部で、入学者に占める一般入試入学者が過半数を超えており、入学ルートは一般入試がメインと言える。逆に言えば国公立大志望の受験生は、一般入試対策を視野に入れざるをえない。一方、私立大は大学・学部によりさまざまだが、全体としては「一般入試で半数以上の入学者を確保」と「他の入試も含めて入学者を確保」に二分されている。

3. [私立大学]推薦入学者の内訳

指定校・付属校からが過半数超！

「多様な入試方式」の掛け声のもと、この10年余りで推薦入試・AO入試の新規導入は加速度的に進んだ。とりわけ、私立大では推薦入試は、総入学者数の約4割を占める、一般入試と並ぶ入試方式だ。

ひとくちに推薦入試といっても「公募」「指定校」「付属校」の3種類がある。従来、文部科学省による情報はすべてをまとめて「推薦」だ。そのた

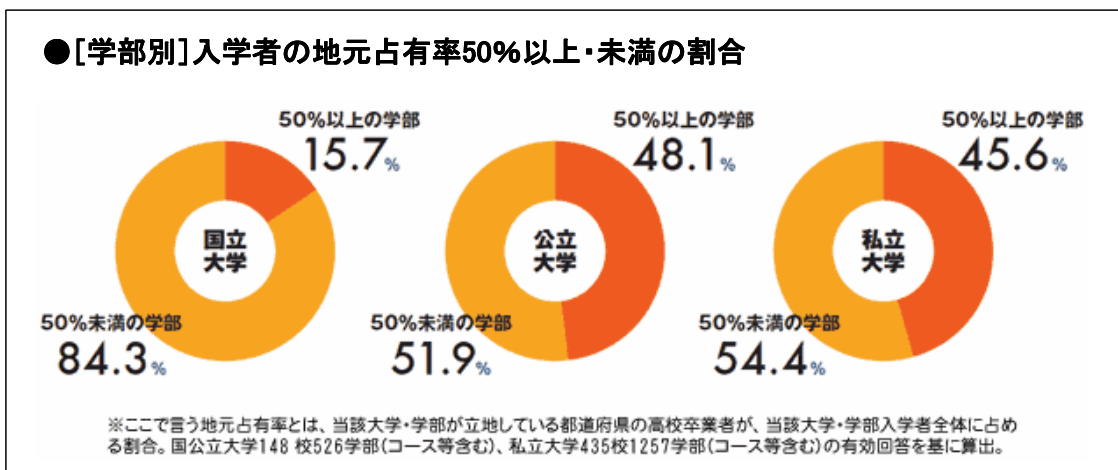


め、「公募」「指定校」「付属校」の各割合については公には不明だった。

今回の調査で、入試方式別の入学者の明細を、非公表や合算などを含むことなく回答した私立大は、208校 545学部（コース等含む）だった。全私立大に占めるカバー率は36.0%ではあるものの、これまでその実態の把握が困難だった状況を考えると、データの開示は歓迎したい。

公募の割合が低い一方、高校入学時点で出願資格の有無が、ほとんど自動的に決まる「指定校」「付属校・系列校」の割合が高いという印象は強い。大学入学者の質の担保という側面もあるだろうが、入学者確保を確実なものにしたいという大学側の思惑も見て取れる。

4. 入学者の地元占有率 看護・医療系、理・工・農学系で顕著な占有率の高低！



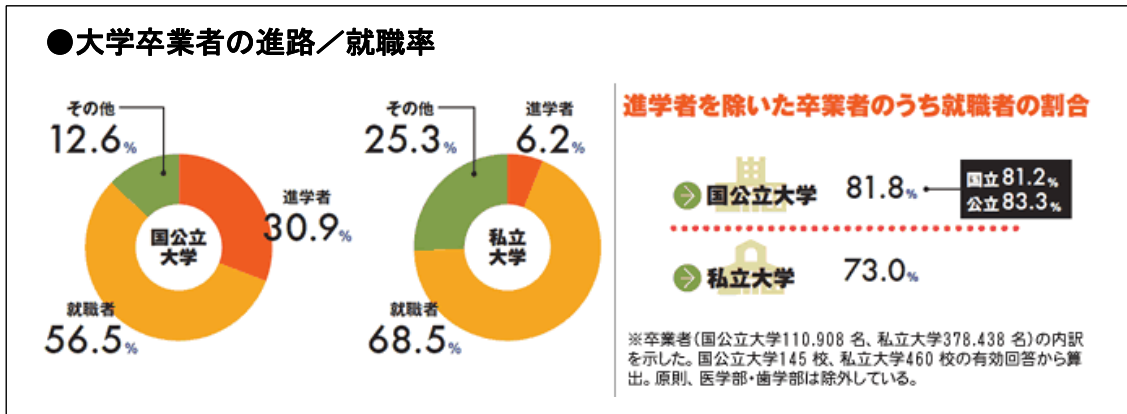
大学進学者の地元志向が言われて久しい。背景には、子どもにひとり暮らしはさせられないという保護者の家計事情がある一方、受験生には、実家から通ったほうが家事をしなくて楽といったマインドもあるのだろう。この傾向は、進路指導を担当する先生から異口同音に聞く。

グラフでは、有効回答があった大学・学部（コース等含む）を、地元占有率50%以上&未満の学部で分類し、その占める割合を示した。公私立大では、地元占有率50%以上の学部が半数近くある一方で、国立大は地元占有率が低いという特徴的な結果となった。もちろん国立大でも、地元占有率が70、80%の学部が教育系統を中心にある。その一方、国立の難関大学、医学部、理・工・農学系学部には全国から学生が集まってくることで、地元占有率を全体として押し下げる要因のひとつになっていると考えられる。

図示はできなかったが、系統別では「理・工・農学」系統が特徴的だ。地元占有率50%以上の学部が国立大4.3%、公立大37.5%、私立大37.3%と、圧倒的に地元占有率は低い。

「医学」系統も同様だ。逆に「看護・医療」系統は地元占有率50%以上の学部が公立大72.3%、私立大63.4%にのぼる。

5. 大学卒業者の進路 国公立大の進学率の高さが浮き彫りに！



大学卒業後の進路を国公立大・私立大別に、卒業生全体に占める進学者、就職者の割合を示すとともに、進学者を除いた卒業生に占める就職者の割合を算出した。

国公立大の進学率の高さが浮き彫りになっている。詳細データを示すことはできなかったが、とりわけ、理・工・農学系学部の進学率は高い。進学率 50.0%以上の数値を示した国公立大学 43 校 93 学部（コース等を含む。以下同）のうち、83 学部が理・工・農学系統だった。東北大、東京工業大、京都大など研究拠点大学が名を連ねた。

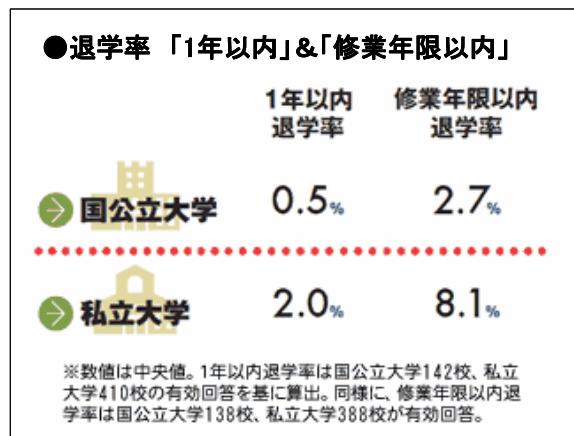
一方、就職率として、実態を客観的に表すと考えられる数値を併記した。算出式は「就職者÷(卒業生-進学者)」。私立大は、大学・学部数が多いため設置されている学部系統もさまざま、進路も多種多様だ。たとえば、芸術系学部を卒業してフリーランスの活動をはじめるといったケースも少なくない。なお、進学者を除いた就職率が 50%未満という結果を示したのは、国公立大は 13 校 15 学部、私立大は 61 校 83 学部だった。

ここで示した数値は全体像であり、卒業後の進路は、大学によってさまざま。個別具体的な大学・学部の進路実態は、本誌データページから読み取ってほしい。

6. 退学率 数値としての退学率は存在するものの、圧倒的多数は 0%！

退学率の高低だけを切り取って、大学の価値を見るのは困難だ。本誌編集部は、そう考え、基本調査データとして各大学・学部の退学率を示すことはしていない。

もちろん、退学率を、大学評価の指標のひとつと考えることに異論はない。ただし、退学という事象の裏に隠れている、その学生にとっての現実がひとつではないのも事実だ。積極的な学問志向の変更、学問との



アンマッチング、仮面浪人、災害等による家計急変などの経済的事情、単位認定の厳格化など、ポジティブ・ネガティブ両面の事情があつての退学だ。そのため、単年度データで判断をするのは難しい。

データとして示したのは、入学 1 年以内退学率と修業年限以内退学率の全学部（コース等含む）の中央値だ。個別データは示していないが全体を俯瞰してみると、高い大学、低い大学さまざまではあるものの、圧倒的多数は 0%の学部だ。退学率が低くて悪いという話にはならない一方、高いからといって悪いとは限らない。たまたま、その年に「低かった」「高かった」だけかもしれない。問題なのは、高い退学率を示し続けている場合だ。センシティブなデータゆえに、大学によっては、ホームページ等では公表をしていない場合も多い。

●各大学の詳細データは[『大学の真の実力 情報公開 BOOK』](#)を参照。